

句接辞「ーがち」の史的展開

内富，純江
九州大学大学院修士課程修了生

<https://doi.org/10.15017/8916>

出版情報：語文研究. 100/101, pp.30-43, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：published
権利関係：



句接辞「-がち」の史的展開

内 富 純 江

0. はじめに

現代語において、傾向を表す接尾辞の一つに「-がち」というのがある。

- (1) その作家は、ここ数年病気ががちでなかなかまとまった仕事ができないと言っている。
- (2) 惰性で仕事を続けていると、この仕事に飛び込んだ頃の若々しい情熱を忘れがちになる。

(『日本語文型辞典』)

形容動詞化する接尾辞であり、名詞に接続し「その性質を帯びていること」を、動詞連用形に接続し「そのような傾向にあること」を表すものとして現在用いられている。

(1)「病気がち」の「-がち」は「語」の「構成要素」としての「接辞」として機能しているが、(2)「この仕事に飛び込んだ頃の若々しい情熱を忘れ」+「がち」のように、^(注1)「語」のレベルを越えた要素に接続していると思われるものもある。

接辞とは、いくつか辞書の類を確認してみたところ以下のような説明が見られる。

語構成要素の従属的な要素で、それ自身は単独で用いられることがなく、語基である単語や語根の後に付いて、一つの単語の構成要素となるもの

(『日本語文法大辞典』)

一般的にみて、接辞の機能とは(1)にみえる「語」の「構成要素」であると言えそうである。しかし、現代語においては(2)のごとく、「語」のレベルを越えて接続していると考えられる例もある。影山(1993)は、現代語におけるこの種の接辞を取り上げ^(注2)「句の包摂」現象として考察を加えている。その指摘に

よれば、句の包摂現象はいかなる場合にも起こりうるのではなく、用言句を受け、それが従属句または述語句を形成する時のみ起こるものとする。決して一般的とは言えない「語」を越えたレベルのものに接続する句接辞について歴史的にその展開を見てみるために、ここで句接辞的な傾向が現代語において顕著にみられる接尾辞「-がち」を取り上げ検討してみることにする。

1. 現代語における「-がち」の実態

(3)

a. 【名詞接続】

伏し目がちにベンチに引き揚げる選手たちを早川監督が笑顔で迎えた。

(2004/8/9)

b. 【動詞連用形接続】

面倒な仕事はつい後回しにしがちで、私も今、1年近くたまった新聞のスクラップに追われている。

(2004/8/19)

c. 【受身の助動詞接続】

「敷居が高い」と思われがちな伝統芸能だが、ぐっと身近なものに仕上がっている。

(2004/8/19)

d. 【補助動詞接続】

暑い日が続くと、食欲が落ちてしまいがちですね。色を工夫して、食欲増進をはかってみませんか。

(2004/8/7)

現代語の用例について、朝日新聞データベース（2004年8月1日から2004年9月3日）を調査対象に、以下2点に着目して考察を加えていく。

品詞別にみた上接部の傾向

レベル別にみた上接部の傾向

上接部のレベル分類の際、判断が困難な用例もわずかながら存在したが、現代語の扱いとしてそのような用例はすべて「語」のレベルの方に加算しても結果は【表1】のようになる。

全用例202例中、品詞別に見ると動詞連用形に接続する例が突出した数確認される。また、直前を名詞で受ける場合の用例は、すべて直前の一語を受けている。それらは更に「病気、留守、伏し目」等の語に集約される傾向にあって、結合する語との固定化が目立つ。レベル別に見ても、全体の約73%が句を受け、句接辞として積極的に機能していることがわかる。

【表1】

上接部の品詞	用例数	上接部のレベル	
		語	句
名詞	17	17	0
動詞連用形 自動詞(83) 他動詞(59)	142	38	104
助動詞 受身(36) 使役(1)	37	0	37
補助動詞	6	0	6
計	202	55	147

2. 句の判断基準

では、本論で特に着目している接尾辞「-がち」が受ける上接部のレベルについて考察を加えていくことにする。詳しい分析に入る前に、まず「語」のレベルを越えた「句」という概念の定義について簡単に触れておく。影山(1993)に定める「語の定義」を応用し、本論においては「語の定義」を超えたものを「句」と認定し、取り扱うこととする。

《語の定義》

影山(1993)では、語の形態的緊密性^(注3)という性質をもって「語」とする定義を以下大きく4つの角度から捉えている。

形態的な不可分性

語を統語的に分断することはできない。

統語的要素の排除

語の内部には、句、格助詞、時制などの統語的な要素は侵入できない。

外部からの修飾の禁止

語の一部を外から修飾することはできない。

語彙照応の制約

語の内部の要素を代名詞で指したり、文レベルの規則で削除したりすることはできない。

実際にレベル分類に際し、曖昧な用例も存在したが上記定義を参考に判断した。^(注4)

3. 接尾辞「-がち」の史的変遷

中古・中世・近世期の用例は、『日本古典文学大系』、『中世王朝物語』、『新本大系』、『洒落本大成（第1巻～第21巻）』、『抄物資料集成』、『続抄物資料集成』、近松浄瑠璃を調査対象にした。

3-1. 中古における実態

本論においては『大和物語』にみられる1例を「-がち」の初出例と判断し、極めて初期の用例、『大和物語』、『蜻蛉日記』にみられる用例全10例を以下すべて列挙する。

『大和物語』の用例

- (4) かくて、この男は、こゝかしこ人の國がちにのみ歩きければ、二人のみなむみたりける。

『蜻蛉日記』の用例

(5)

- a. 春うち過ぎて夏ごろ、宿直がちなるこゝちするに、つとめて一日ありて、暮るればまゐりなどするを、あやしうと思ふに、ひぐらしの初声聞こえたり。
- b. 水は石がちなるなかよりわきかへりゆく。
- c. あしたの、かごとがちになりたるも、今さらにと思へば悲しうなむ。
- d. 八日ばかりに見えたる人、「いみじう節会がちなるころにて」などあり。
- e. 十月、例の年よりも時雨がちなるころなり。
- f. かゝることを尽きせずながむる程に、ついたちより雨がちになりたれば、「いとゞ歎きの芽をもやす」とのみなむありける。
- g. 「あらず、こゝには、へ」と重点がちにて返したりけむこそ、なほあれ。
- h. 本つ人をだに、あやしうくやしと思ひげなる時がちなり。
- i. るい多く、若き人がちにて、箏、琵琶など、をりにあひたる声に調べなどして、うち笑うことがちにて暮れぬ。

全用例すべてが体言接続で「～することが多い」「～の状態が続く」の意を添える。単純に直前の一語を受ける例が殆どであるが、『大和物語』(4)、または『蜻蛉日記』(5) h.i.のように、「(人の國) がちに」、「(あやしうくやしと思ひげなる) 時がちなり」、「(若き) 人がちなり」、「(うち笑う) ことがちなり」など、名詞句を受けると判断できる用例を確認することができる。

その他中古の作品における実態

(6)

【名詞接続】

- a. 行く末みじかうもの心ぼそくて、をこなひがちになりて侍れば
(『源氏物語』・柏木)
- b. この月はかみわざ^{かみわざ}神事がちなるほどにて、いづれの御方も、まかりのぼら
せ給はず。
(『夜の寝覚』・巻3)
- c. 四十九日はじめ給て、日々に、あはれに尊きことどもを聞き給まゝに、
「などで、年比も、たゞ疾くかやうになりて、罪を少しも失はざりつらん」
と、くやしければ、苦しきもせちに念じつゝ行ひ給へど、「露よりも前に
や」と見ゆる折がちになりまさり給ふ。
(『狭衣物語』・巻4)
- d. 世の中の心ぼそく悲しうて、見る人聞く人は、朝の霜と消え、夕の雲とま
がひて、いとあはれなることがちにて、「あるは少なく、なきは数そふ世
の中」と見え侍れば、「わが世や近く」とながめくらすも、心地つくしく
だくことがちにて…
(『堤中納言物語』・よしなしごと)

【動詞連用形接続】

- e. かゝるたぐひあらむやと、うち嘆きがちにて夜ふかし給ふも、
(『源氏物語』・篝火)
- f. さかしら心あり、何くれとむつかしき筋になりぬれば、わが心地もすこし
たがふふしも出で来やと心をかれ、人もうらみがちに、思ひのほかの事を
のづから出で来る
(『源氏物語』・若紫)
- g. 明けぬ夜の心ちながら、九月にもなりぬ。野山のけしき、まして袖のしく
れをもよをしがちに、ともすればあらそひ落つる木の葉のをとも、水の響
きも、涙の滝も、ひとつものやうにくれまどひて、…
(『源氏物語』・椎本)

全用例193例中、名詞接続：130例、動詞連用形接続：63例である。(6) a.b.
e.は語レベルでの接続例であり、中古においては「-がち」が直前の一語を受
ける例が圧倒的に多い。また、『宇津保物語』を初出に動詞連用形に接続する
用例も確認できる。(6) c.d.f.g.は句レベルを受ける用例で(6) c.d.のよう
に名詞句を受ける形式と(6) f.g.のように用言句を受ける形式が存在する。
現代語の感覚では、(5) h.i.のように名詞句を受ける用例は「[あやしうくや
しと思ひ]がち/[うち笑ひ]がち」のように、動詞連用形接続の形で十分理

解できそうである。しかし実際のところ、「時」や「こと」、「折」や「人」といった形式名詞またはそれに近い形式を介在させ、体言接続となっている。この点は、現代語の用例からは確認できず初期の大きな特徴と言えそうである。

【表2】中古の実態

中古の作品	全用例数	品詞別		レベル別	
		名詞	動詞連用形	語	句
初期	16	16	0	10	6
中期	146	91	55	125	21
院政期	31	23	8	24	7
全用例	193	130	63	159	34

3 - 2 . 中世における「- がち」の実態

(7)

【名詞接続】

- a. 其間二我老テ平生災難ガチテアリシカ今災ヲ免テ北ニ歸レハカヘモノトテ
違例ヲスル (『四河入海』)
- b. 多病 - イツモ違例カチテ内ニフセリオレトモヨク治タソ (『史記抄』)

【動詞連用形接続】

- a. 常よりも殊なる気色を見捨て難く心苦しくて、顧みがちにのみ慰めて
(『苔の衣』・冬)
- b. 尽きせぬ思ひのみ晴るる世なくおぼえたまふままには、ただながめがちに、
うちしめり給へるありさま、なかなかうつしく見ゆ。(『あさぎり』)

全用例61例中、名詞接続：34例、動詞連用形接続：27例であった。動詞連用形接続の用例の殆どは「顧みがち」であり、動詞連用形接続の際の活発な造語性はこの時期確認されない。

【表3】中世の実態

中世の作品	用例数	品詞別		レベル別	
		名詞	動詞連用形	語	句
鎌倉期	29	13	16	29	0
室町前期	14	7	7	14	0
室町後期	18	14	4	17	1
全用例数	61	34	27	60	1

3 - 3. 近世における「-がち」の実態

(8)

【名詞接続】

- a. 夜食はけんどんの麵類がちなり。 (洒落本・『酔字瑠璃』)
 b. 往昔ていとにありしほどは、すぐれて貧朝夕の烟だにたえまがちなるなかにも (斬本・『新竹斎』)

【動詞連用形接続】

- c. 大鋸くずのしめりがちなり春のあめ。 (斬本・『百面相仕方ばなし』)
 d. 軒のともし火きえかちに火入のはいもおちくほころ (洒落本・『烟花漫筆』)

【否定助動詞接続】

- e. 表へ出る事なら成就すれども内所事は調わぬかちなり (洒落本・『擲銭青楼占』)

【形容詞接続】

- f. 夏の温石と女郎の心はつめたいがちのものなればそれゆだんはなるべからず (洒落本・『娼妓絹麿』)

全用例77例中、名詞接続：37例、動詞連用形接続：19例、否定の助動詞接続：20例、形容詞接続1例であった。前代までは上接部に動詞連用形が接続し用言句を形成している場合、その句内は肯定内容に限られていたが、この時期の特徴は(8) eのごとく上接部に否定内容のものを受ける「-ぬがち」型が確認されることである。否定助動詞接続の場合、「Aは[Bぬ]がち」という形式をとり、そのすべてが句レベルの接続であると考えられる。さらに、用例数としてはあまり多くはないものの、(8) fのごとく形容詞に接続する形式もこの時期特有のものである。

【表4】近世の実態

近世の作品	全用例数	品詞別				レベル別	
		名詞	形容詞	動詞	否定助動詞	語	句
近松浄瑠璃	3	2	0	1	0	2	1
洒落本	50	21	1	10	18	28	22
斬本	17	9	0	6	2	13	4
和英語林集成	7	5	0	2	0	7	0
全用例	77	37	1	19	20	50	27

3 - 4 . 近代における「 - がち」の実態

近代の用例として『新潮文庫の百冊』と『明治・大正の文豪』を調査対象に取り上げた。『新潮文庫の百冊』の中で、翻訳本に関しては翻訳時期の特定が困難なため今回の対象からは外して扱っている。

(9)

【名詞接続】

- a. その頃瘦世帯を張っていた養父は、それまで義理の母親に育てられて、不仕合せががちであったおいらと一緒にってから、二人で心を合せて一生懸命に稼いだ。 (『あらくれ』)

【動詞連用形接続】

- b. 学校へ行く時間がせまっていたが、彼は立ちあがる気がしなかった。必ずしも手帳のことで気をくささせたわけではない。このごろ、彼はともすると、学校を休みがちだった。例の騒動があって以来、だんだん学校に興味を失ってきたのだ。 (『路傍の石』)

【受身の助動詞接続】

- c. こんなものに終始気を奪われがちな私は、さっきまで胸の中にあった問題を何処かへ振り落としてしまった。 (『こころ』)

【否定の助動詞接続】

- d. しかも気を使って一飯の恩は酬いぬがちでも、睚眦の怨は必ず報ずるといふ蚰蜒魂で、気に入らぬ者と見れば何かにつけて真綿に針のチクチク責をするが性分。 (『浮雲』)

全用例305例中、名詞接続：66例、動詞連用形接続215例、形容詞接続：5例、助動詞接続：19例とこの時期からかなり品詞別分類に偏りが現れる。確実に句を受けていると判断できる例も141例と全体の約半数を占める結果である。一方で前代に盛んな接続をみせていた用言句内の否定構造は、

(10)

- a. 人世の困難に遭遇て、独りで苦悩して独りで切抜けると云うは俊傑の為る事、並や通途の者ならばそうはいかぬがち。 (『浮雲』)
- b. どんなに気がついて、しんせつでも、女中じゃ推切って、何かすることができませんからね、どうしても手が届かないがちになるんです。 (『金色夜叉』)

など「-ぬがち」型、そして「-ないがち」型がわずかながら確認できるが、この「-ないがち」型は、その後現代に至るまで確認できないことから考えると、近代前半に衰退したものと思われる。「-ないがち」型の衰退同様に、形容詞接続の例も確認できない。

【表5】近代の実態

時代	作品名	用例数	品詞別				レベル別	
			名詞	形容詞	動詞 連用形	助動詞	語	句
明治	浮雲 (1887) - 高野聖 (1900)	22	6	4	12	0	9	13
	我輩は猫である (1905) - 雁 (1911)	15	6	0	8	1	9	6
大正	行人 (1912) - 痴人の愛 (1924)	76	22	1	50	3	41	35
昭和 戦前	夜明け前 (1929) - 人生論ノート (1941)	45	1	0	37	7	17	28
昭和 戦後	焼跡のイエス (1946) - 点と線 (1957)	23	2	0	20	1	15	8
	雁と寺 (1961) - 花摘み (1970)	70	8	0	56	6	39	31
	二十歳の原点 (1971) - 新源氏物語 (1984)	54	21	0	32	1	34	20
	計	305	66	5	215	19	164	141

3 - 5 . 史的変遷のまとめ

品詞別に用例数の多いものから順に、



で表したものが【図1】である。

【図1】

時代	中古	中世	近世	近代	現代
名詞				斜線	斜線
動詞連用形	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線
形容詞			斜線		
否定の助動詞			斜線	斜線	
受身の助動詞				斜線	斜線
使役の助動詞				斜線	斜線
補助動詞				斜線	斜線

接尾辞化された当初の用例から現代の用例に至るまでの通時的な変遷過程をみると、名詞接続での造語性と動詞連用形接続での造語性がほぼ相補分布をなしていることが分かる。現代語において名詞接続の例は全体の約8%、つまり1割にも満たない割合であったが、中古の用例においては、全体の約67%、7割近くも占めている。

比較的初期の段階においては、名詞一語を受ける用例数が多く確認され、近世期には、否定助動詞接続への広がり、更に近代に入ってから、受身・使役助動詞接続への接続の広がり、徐々に語のレベルを越えた接続例が確認される。現代語において句レベルを受ける割合は全体の約73%を占めているが、中古においてはそれがわずかに全体の17%である。その割合の中でも、半数近い14例は「- ことがち / - ときがち」に代表されるように連体修飾の形式である。こういった名詞句を受ける形式は現代語においては確認されない。「- がち」が直接接続する上接部の品詞の推移に伴う形で、受けるレベルも「語」から「句」へ拡張していると判断できそうである。

4. 動詞連用形接続型にみられる動詞の集約現象

「- がち」の展開を追っていく中で近代以後ある一つの特徴に気づく。それは、近代に入ってから動詞連用形に接続する用例数が急激に増加する点は前章で述べた通りであるが、その広がりをみせる動詞にも偏りが現れてくることである。現代語において「- がち」が接続する動詞のうち、もっとも用例数の多かった「- なりがち」「- しがち」「- ありがち」という形式に注目して整理していたものが以下の表である。

【表6】

	作 品 名	動 詞 連用形	動 詞		
			- ありがち	- しがち	- なりがち
中古	大和物語～とりかへばや	63	(0)	(2)	(0)
中世	平家物語～あさぎり	27	(0)	(0)	(0)
近世	浄瑠璃・洒落本・噺本	19	(0)	(0)	(0)
明治	浮雲 (1887)～雁 (1911)	20	(5)	(3)	(0)
大正	行人 (1912)～痴人の愛 (1924)	50	(9)	(4)	(2)
昭和 (戦前)	夜明け前 (1929)～人生論ノート (1941)	37	(3)	(3)	(5)
昭和 (戦後)	焼跡のイエス (1946)～点と線 (1957)	20	(1)	(1)	(2)
	雁と寺 (1961)～花摘み (1970)	56	(3)	(5)	(5)
	二十歳の原点 (1971)～新源氏物語 (1984)	32	(3)	(1)	(1)
現代	朝日新聞 (04/8/1～04/9/3)	144	(29)	(41)	(7)

近世期までの用例でも、「- がち」が動詞連用形に接続する例は確認できる。しかし、今回着目した3動詞「なる」「する」「ある」という動詞は、単独動詞としてはもちろん存在していたにも関わらず、接尾辞を伴った形「- なりがち」「- しがち」「- ありがち」での用例は現段階では一例も確認できない。^(注5)

それが近代では305例中、動詞連用形接続が215例、うち、「- なりがち」「- しがち」「- ありがち」は計56例確認でき、動詞連用形接続の例の約26%を占める。

- (11) 欠点の多い人間は同じように欠点の多い人間に対して同情的になりがちなものなのだ。 (『世界の終わりとハードボルド』)
- (12) 姉のいう事は脱線しがちであったけれども、 (『道草』)
- (13) もとより青年にありがちの誇負もあれば誇張もある。 (『邪宗門』)

現代においては202例中、動詞連用形接続は144例、うち、「- なりがち」「- しがち」「- ありがち」は計77例確認でき、動詞連用形接続の例の約53%を占める。

- (14) つい気持ちが焦り、悲観的になりがちだ。 (2004/8/11)
- (15) 雨の降る日はタイヤが横滑りしがち。 (2004/8/28)
- (16) 伝統校にありがちな「貫禄」よりも、「成長期」のような伸びやかさがあった。 (2004/8/1)

近世期までの結果で、「- がち」が動詞に接続を広げていく点は確認してきたことであるが、近代に入り、更に動詞連用形接続の際の盛んな造語性が確認せれる一方で、接尾辞を伴う動詞が「なる」「する」「ある」という代動詞的な機能をもつこの3動詞に集約される傾向が指摘できる。

この事実は、「なりがち」、「しがち」、「ありがち」という進んだ形で一語化され、この形式ですでに一つの接尾辞として機能しつつあるのではないかと考える。この結果、上接部にくる語の制限がかなりゆるくなった。一例であるが「- (に)なりがち」の形式が成立することによって、「- がち」文の構造が整理される。つまり、その上接部にくる品詞の制限がゆるくなり、より自由な接続が可能になったと考えられる。

(17)

- a. 夏期休暇中は、夜型の行動パターンになりがちだ。 (名詞)
- b. けが人ができると、チームの雰囲気は暗くなりがちだ。 (形容詞)
- c. だんだんと学校に行かなくなりがちだ。 (否定助動詞)

上記形式の成立によって、近世期のみを確認される否定助動詞接続、形容詞接続の衰退理由の説明がつく。

動詞「する」は実に多種多様な使われ方をするが、いかなるときも「する対象」「する様子」を必要とする動詞である。また、動詞「なる」も、「なる対象(変化の対象)」を、動詞「ある」も「ある場所(存在する場所)」を必要とする。この事実は、「-がち」が受ける範囲が「語」から「句」へと拡大する推移と関係があるのではないか。つまり、近代以降「句」のレベルまでを「-がち」が一般的に受けるようになった形式面の流れと、句接辞としての機能が用言句を積極的に受けるようになっていった一連の流れとが、これら3動詞の造語性と適応し、広がりを見せたのではないかと考える。

5. おわりに

現在、句接辞として活発に機能している接尾辞「-がち」を今回調査対象に取り上げ、その展開過程を明らかにしてきた。接尾辞化された比較的初期の用例と現在の用例に見える句接辞としての機能の違いを明白に示すことが本論の主だった目的であった。

また、通時的な流れの中で特に本論においては近代に入ってから用例に着目した。「なりがち」「しがち」「ありがち」の形式が整い、「-がち」上接部にくる制限がゆるくなったこの動詞集約現象を、句接辞という一面から捉えた近代語化の一例として考えられないだろうかと今回提案する。他の句接辞「-ぎみ」「-そう」「-がる」「-すぎ(る)」も同様の調査を行ってみたが、動詞集約現象ならびに助動詞接続への広がりといった、句接辞としての機能が活発に展開される時期は近代に入ってからと大変興味深い結果を得ることができた。今回の結果を踏まえ、句接辞の展開過程から近代語化の実態を探っていくことを今後も進めていきたい。

注

- (注1) 「この仕事に飛び込んだ頃の若々しい情熱を」 + 「忘れがち」と区切らず、「この仕事に飛び込んだ頃の若々しい情熱を忘れ」 + 「がち」と句を受ける用例に分類した理由としては、形容動詞化する「- がち」の性質による。つまり、「忘れがち」の品詞は形容動詞であり、形容動詞の性質上「情熱を」という目的語を受け機能をもたない。本論において、このように他動詞に「- がち」が付接する際の「- がち」が受ける範囲は「目的語 + 他動詞」と定め統一的に調査を行うこととする。
- (注2) この点について、影山 (1993) では、語の内部に句が取り込まれるという現象は英語その他の外国語でも観察されると指摘しているが、あくまで例外的とする制限を加えている。
- (注3) 影山 (1993) で定める定義で、語は形態的なまとまりを構成するから、その内部に統語的な要素を介入させることは許されない性質を、語の形態的緊密性という。
- (注4) 本論において以下のような用例は句として取り扱うことにする。

《判断テスト》

日本語の屈折は、

動詞なら「食べる、食べた、食べて、食べれば」等

形容詞なら「美しい、美しく」等

の時制屈折や接続形の語尾を指す。これらの形式は、そこで「語」という単位を閉じ、それ以上に何かが付くと句の領域に移る、という特徴を持つ。(影山 (1993))

これに従えば、

- ・ 全体的に地味なものが多く、花も「一日花」など、観賞期間が[短くなり]がち。(2004/8/3)

これらの用例はすべて「句」のレベルを受けているものと判断する。

《判断テスト》

- ・ 頭がズキズキする。

頭はズキズキ、心臓はドキドキした。

オノマトペに「する」が付いた表現は一見したところ、全体で1つの動詞になっているかに思えるが、「句」であって「語」にならない。(影山 (1993))

これに従えば、

- ・ 周りに怒りっぽくて [イライラし] がちな人が多くなった気がしないだろうか。(2004/8/14)

これらの用例は本論においてすべて「句」レベルとして扱うこととする。

《判断テスト》

「動名詞」... 「する」と複合することによって動詞化する表現。

- ・ a. 散歩する、研究する、徹夜する
- ・ b. 立ち読みする、夜遊びする、買物する
- ・ c. テストする、プリントする

(影山 (1993))

「VN する」のようにVNがヲ格を伴った形式が句であることからすると、ヲ格を伴わない「VN する」の形式が複合語であることは、直感的には自明であるかに思えるが、実際はそうではない。

- ・ a. 出席したりしなかったりするのは良くない。
- ・ a'. 出席をしたりしなかったりするのは良くない。

- a'. メガネをかけたりかけなかったりするの**は**良くない。
- b. 同意しても**し**なくても
- b'. 同意をしても**し**なくても
- b''. 100点を取っても取らなくても

一般的に「語」という単位は、形態的緊密性という性質のため、その一部分だけを統語的に削除することはできない。つまり、「VN する」はヲ格を伴っていないにも拘わらず、語ではなく句であることを示唆している。 (影山 (1993))

これに従えば、

- ・ 原発事故といえ**ば**放射能に注目**し**がちだが、他の炉型や火力発電所にも共通する技術的な弱点があるとすれば、根は深い。

「注目する」 注目**し**たり**し**な**か**つたり**す**る。 () ... 句

(注5) 以下2例ほどサ変動詞として、中古の用例において確認される。

くつろぎがましく歌誦**じ**がちにもあるかな、 (『源氏物語 (帚木)』)

さての人へは、みなをく**し**がちに鼻白める多かり。 (『源氏物語 (花宴)』)

これらの用例は近現代確認されるサ変動詞に比べ、性質が異なると考えられる。つまり完全に一語化された例であり、「誦」「臆」は独立性のない一字漢語である。よって、これら2例の場合は「漢語 + サ変動詞」という形式に分解して理解することは不可能である。それに比べ、近現代の用例が「無視を**し**がち」「理解を**し**がち」とヲ格を介することが可能であり、その機能として代動詞的なサ変が漢語に付加されていると理解できる。この点からみて、性質の違うサ変と扱ってよいのではないであろうか。

参考文献

- 青木博史 (1999) 「中世室町における「動詞連用形 + ゴト」構文について」『国語学』198
 ————— (2002) 「古代語における「句の包摂」について」『國語國文』71巻7号
 ————— (2003) 「「~サニ」構文の史的展開」『日本語文法』3巻1号
 漆谷広樹 (1992) 「中古中世における「~がち」について」『山形女子短期大学紀要』24
 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』

(うちとみ すみえ・本学大学院修士課程修了生)